

ボランテニア精神の源を訪ねて……⑧
なぜ、こんぴらさんが「海の神さま」なのか

新年あけましておめでとうございます。
平成二十五年癸巳。今年も皆様にとりまして実りの多い幸せな一年でありますようお祈り申し上げます。

おかげさまで連載8回目を迎えます「歴史探訪」シリーズ。これまで書院や海難絵馬、旭社など金刀比羅宮に伝わる貴重な文化財をご紹介させていただきましたが、今回は金刀比羅宮の歴史や由緒を踏まえ、なぜ、こんぴらさんが「海の神さま」なのかをご説明申し上げたいと思います。

◆素朴な疑問◆

ご参拝の皆様からよく「こんぴらさんは海の神さまなので、もっと海の近くにあるのかと思っていた。」「海の神さまなのに、なぜ山にあるの?」と質問されることがあります。海と山、そして海の神さま“こんぴらさん”と山の関係が、なかなか繋がらないようなのです。私は次のように順を追ってご説明申し上げます。

◆ご祭神について◆

まずはじめに金刀比羅宮のご祭神について。金刀比羅宮のご祭神は「大物主神」と「崇徳天皇」の二柱の神さまです。二柱の神さまを合わせ祀り「金刀比羅大神」と称します。

大物主神は日本の国造りに励まれた神さまで、当宮が鎮座する琴平山はその拠点と伝わります。

この由緒地に創建されたのが当宮です。古くは「琴平社」あるいは「琴平神社」と呼ばれていました。

「保元の乱」と呼ばれる平安末期の政治抗争に巻き込まれ、讃岐国(香川県)に配流された崇徳天皇。天皇は配流中、特に当宮を篤く崇敬されました。

当宮境内には崇徳天皇参籠跡と伝わる旧跡が存在します。崇徳天皇は帰京の悲願叶わず長寛二(1164)年に崩御されましたが、所縁も深い当宮ではお寂しい御生涯をお偲び申し上げ、翌年の永萬元(1165)年に御霊をお祀り申し上げたといわれます。



◆御本宮高台からの眺望
本宮の北東側は、高台が広がり、展望台になっています。ここからの眺めは絶景です。讃岐平野の彼方に瀬戸大橋や讃岐富士などを望むことができます。



◆竜王社
噴火口跡にできたといわれる竜王池に鎮座する社。水の神である罔象女神(みずはのめのかみ)、天水分神(あめのみくまりのかみ)、国水分神(くにのみくまりのかみ)をお祀りします。古くから祈雨の神として知られていました。

◆金毘羅大権現◆

大陸から伝来した仏教は日本古来の神社のあり方を根本から変えてしまいました。平安時代以降、日本の神さまは仏さまに比定されるようになります。これを「神仏習合」思想といいます。当宮も例外ではなく、ご祭神の金刀比羅大神は仏教由来の神さまである金毘羅(宮毘羅)大将と同一視され「金毘羅大権現」と呼ばれるようになりました。「権現」とは「権(仮)に(神仏として)現れる」という意味で、神さまのご称号である「神号」として各地の神仏習合の寺社で使われました。神仏習合の教えは明治まで続きますから、“こんぴらさん”は実に長い間“金毘羅大権現”と呼ばれていたこととなります。“こんぴらさん”の名称は諸説ありますが“金毘羅大権現”の“金毘羅”に因むという説が有力です。

◆水神◆

当宮の鎮座地である「琴平山」は古くから蛇神(=龍神)が住まう神聖な山として人々から篤い崇敬を受けました。一説には山そのものが神さまだといわれています。いわゆる「神体山」信仰です。ちなみに、江戸時代の書物には、当宮のご祭神は大和三輪(奈良県)の神と同一であると書かれています。大神神社も同じく大物主神さまをお祀りし



◆高燈籠
慶応元(1865)年、香川県寒川郡の萬歳講より献納。当時は、瀬戸内海を航行する船の指標でした。重要有形民俗文化財。

ており、蛇神の伝説や伝承が数多く伝わります。大物主神さまは蛇神(=龍神)ともみなされていたようです。当時の「琴平山」は、山頂付近に湧く雲気が神秘的なこと、またその雲気が農耕に欠かせない恵みの雨をもたらすので、豊穡祈雨の神様が住まうと考えられていたようです。金毘羅(宮毘羅)大将の起源は古代インドのバラモン教の神「クンピーラ」だといわれています。「クンピーラ」はガンジス河に生息するワニを神格化したものです。蛇(龍)と鱈はいずれも水に由来するものですから、「神仏習合」時にインド由来の「金毘羅(クンピーラ)」信仰が取り入れられたのだと思われます。

◆ 航海の目印として ◆

琴平山は楽器の琴を平らにしたような山容から名づけられたといわれます。その特異な山容から瀬戸内海を航行する航海者の恰好の目印となりました。山を航海の目印とすることを「山あて」というそうですが、その対象となる山はしばしば信仰の対象となります。特に「こんびらさん」は「水」に大変所縁のある神さまです。「板子一枚下は地獄」とは船乗りの仕事は危険と隣り合わせだということですが、常に生命の危険に晒される航海者にとって「こんびらさん」はいつも目にとまる山の神さま。神秘的な山容が航海者の心の支えとなったのでしょうか。「こんびらさん」の信仰は航海者たちの活動範囲に沿って瀬戸内海沿岸に徐々に広まっていきます。ちなみに琴平山は、象の頭、あるいは象が寝そべっているように見えることから象頭山とも呼ばれます。

◆ 塩飽の船乗り ◆

岡山県と香川県に挟まれる西備讃瀬戸。この内海に、大小合わせて28の島々から成る塩飽諸島があります。

塩飽諸島は古代より海上交通の要衝として知られ、操船技術に長けた島民は源平合戦の頃より瀬戸内海一帯で活躍していました。安土桃山時代に入りますと、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった時の権力者の保護を受け大いに栄えることとなります。

そしてこの塩飽の繁栄に比例するように「こんびらさん」の信仰は急速に広まっていきます。実はこの急速な信仰の広まりは塩飽の船乗りたちの活躍によるものでした。彼らは自らの船に「こんびらさん」の旗を掲げ各地を廻っていたそうです。塩飽の方々はいわば「こんびらさん」信仰のスポークスマンだったのです。

◆ 航路の発達 ◆

江戸時代に入りますと、出羽国(山形県)の米を大坂(阪)へ運ぶ「西廻り航路」が開かれ、経路にあたる瀬戸内海沿岸の港は大いに賑わいました。航路の開発により海運は賑わい人々の交流は盛んになります。塩飽の船乗りたちをはじめとした海事関係者は「こんびらさん」の「靈験」や「ご利益」を盛んに説いてまわったのでしょうか。「こんびらさん」の信仰は航路伝いに北陸や東北などの他の地方へと伝わり、江戸時代の中頃には全国で「一生に一度はこんびらさん」と憧れる「こんびら参り」の一大ブームが巻き起こりました。

◆ おわりに ◆

「こんびらさん」の信仰は大変古いものですが、「海の神さま」としての信仰は、実は比較的新しいのではないかと私は推測します。もちろんその「海の神さま」としての信仰は、豊穡祈雨の神、水の神として近隣の人々から崇敬を集め、長い長い時の中で培われた「盤石な信仰基盤」があるからこそ、形成されたものであるといえます。

そして江戸時代以降の爆発的な広まりは「こんびらさん」を信仰した海事関係者の方々の熱心な「布教活動」によるところが大きいと思われる。人々の「草の根活動」が「こんびらさん」の信仰の支えとなったのです。鎌倉時代の言葉に「神は人の敬いによりて威を増し人は神の徳によりて運を添ふ」とありますが、「こんびらさん」は海事関係者の「海上安全」にかけた切なる願いの具現・象徴なのではないでしょうか。

◆ 執筆者 ◆



金刀比羅宮 禰宜
琴陵 泰裕氏



琴平山(象頭山)遠景



◆ 流し樽(初穂)

瀬戸内海を航行する船乗りや漁師たちが「海の神さま=こんびらさん」に航海の安全と感謝の気持ちを込めて酒樽を流す風習です。現在でも続く珍しい風習です。